



今年もあの日がやってきました。ドラフト1位で千葉ロッテマリーンズに入団した佐々木朗希選手はあの日、岩手県陸前高田の小学校にいました。3年生のときでした。「校庭まで津波が押し寄せてきました。みんなで必死に高台まで逃げたのを覚えています。正直、なにが起きたのか分からなかったけど、そのことは今でもはっきりと覚えています。」と・・・



ZOZO マリンスタジアムでのある日の練習後。佐々木朗希はロッカールームで当時のことを振り返ってくれた。震災で父と祖父母を失い、日常を失った。避難所で水もなければ、お風呂にも入れない日々を過ごした。幼き心が揺れ動いた。その時、初めて普通の日々のありがたさを知った。

「普通のことが普通でないということを知りました。ご飯を食べること、お風呂に入ること、野球をすること。あたりまえに思えたことのすべてがあたりまえでないことをその時、感じました。普通の毎日がいかに幸せなことだったのかを知りました。」

生まれ育った陸前高田の街は一変した。自転車で1周をした街。山の中に作った秘密基地。思い出のすべてが流され消えた。老人ホームに作られた避難所での日々を余儀なくされた。4年生になると母方の家族のいる岩手県大船渡市へ引っ越しをすることになった。生まれ育った場所から離れるのはつらいことだった。

「転校はものすごくつらかったのを覚えています。」そんな悲しき日々で心を支えてくれたのが野球だった。避難所でもボールを見つけてキャッチボールをした。グラブもなかったのも、人から借りた。野球ができることの幸せを感じながら、没頭した。

それから月日は流れても、まだ東北は完全に復興したとはいえない。いまだ、仮設住宅に住む人はたくさんいる。佐々木朗希は野球ですこしずつ頭角を現した。大船渡高校でも野球部に入り、その存在は高校野球界のだれもが知るものとなった。人は彼を「令和の怪物」と呼んだ。ドラフトでは4球団が競合。千葉ロッテマリーンズ入りが決まった。プロ入り後、震災のことを聞かれると佐々木朗希はことばを選びながら答える。「いろいろな人に支えてもらいました。日本全国の人が支えてくれました。そして世界の人々が支えてくれました。感謝の気持ちです。これからはプロで活躍することで東北の人に明るい話題を提供したいと思います。」

2021年3月11日。佐々木朗希はピンストラップのユニホームに身を包み、千葉ロッテマリーンズの本拠地、ZOZO マリンスタジアムにいる。令和の怪物としてメディアに一举手一投足を追われる立場。しかし、それでもすべてを受け止める。自分が活躍し、メディアに取りあげられることで東北に明るい話題を提供したい。メッセージを発信したい。そう思っている。夢は大きい。震災を経験したからこそ知った日常のありがたみ。人への感謝の想い。それをメッセージに変えて社会に発信するためにも、大きな夢を実現できる存在になりたいと願う。